



ことばで装うジェンダー（第2回講演）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 桃子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/12687

第2回講演

ことばで装うジェンダー

中村 桃子

みなさん、はじめまして、中村です。今日は暑い中、お忙しいところたくさんの方に来ていただき、ありがとうございます。ここで出会い、同じ時を過ごしてよかったなと思っていただけるように頑張りたいと思います。よろしくお願いいたします。

まず最初に、今日のポイントを三つにまとめてみました。

1. 新しい「女ことば」の考え方を理解する。
2. 「女ことば」は「ジェンダーを装う」ひとつの資源（材料）である。
3. 私たちの言語行為は、今ある「女らしさ・男らしさ」を変革する可能性を持っている。

1 「ジェンダーを装う」というテーマの意義

最初に、「ジェンダーを装う」というテーマの意義についてお話ししたいと思います。今回の「ジェンダーを装う」という連続講義全体のテーマをお聞きした時に、実にいいテーマだと感心したんです。だいたいみなさん5回とも参加するとお聞きしましたので、毎回の内容も、「ジェンダーを装う」というテーマに関連したお話になると思います。けれども、もし全体テーマの意義を理解せずに5回の講義を聴いているとしたら、これはもったいない話です。そこで、私が話すべき内容でもないのですが、「ジェ

ンダーを装う」という全体テーマの意義から、簡単にお話ししたいと思います。

1.1 セックス（生物学的性別）、ジェンダー（社会文化的性役割）、 セクシュアリティ（性的指向・嗜好）

現在、人間の性に関して、だいたい大きくこの三つの概念から捉えるということが行われています。ご存じのように、セックスというのは、みなさんの好きなセックスの意味ではなくて、これは笑ってもらいたいところなのですが、これは生物学的な性別の意味ですね。長いあいだ人間の性というのは生物学的な意味で捉えられてきました。そこにフェミニズムが、1960、1970年代にジェンダーという新しい概念を導入しました。人間の性には、生物学的な側面以外に、社会的、文化的な側面があるんだよというために、ジェンダーという概念を提案したんです。

〈「ジェンダー」の意義：生物学的宿命を乗り越える〉

ジェンダーという概念には、さまざまな意義があるんですけども、一番大きな意義は、それまで人間の性は、生物学的に理解されていた、つまり生まれつきのもので、生まれた時に決まっているものと捉えられていたので、変えられないと考えられていたのですが、実は変えられるんだということを私たちに教えてくれた点なんです。

この変えられないというのは、生物学的宿命と呼ばれています。女の人は子どもを産むので、子育てをするのは当たり前。ジェンダーというのは日本語で言うと、いわゆる女らしさとか男らしさというものです。ですから、女らしい女の人は子育てをするのが当たり前で、ついでお料理やお洗濯やお掃除をするのが当たり前。これは変えられなくて、生まれつき決まっているものなんだと言われてきたのが、そうではなくて、変えられるということを、私たちに教えてくれたのが、一番大きな意義なんです。

〈「生物学的基盤論」と二項対立のジェンダー理解〉

ところが、せっかくジェンダーという概念が提案されたにもかかわらず、

このセックスとジェンダーが、どのように理解されたかという、「生物学的基盤論」と呼ばれる形に理解されました。生物学的基盤論とは、人間は、生まれた時に決まった女か男かどちらかのセックスに基づいて、それぞれの文化の女らしさ・男らしさを学ぶという考え方を指します。生物学的なセックスを基盤にして、ジェンダーである女らしさ・男らしさを学ぶという考え方です。せっかく、ジェンダーは変えられるんだと教えてもらったのに、そのジェンダーが、生まれつき決まっているセックスに基づいているとしたら、変えられないことになってしまいます。ジェンダーがセックスに基づいて学ばれるならば、ジェンダーはセックスと大して変わらないことになってしまい、ジェンダーを提案した意味がなくなってしまいます。このように、ジェンダーは、長いあいだ、その意義が理解されなかったんです。

生物学的基盤論から導き出されるジェンダーの特徴は、男女が二項対立の関係になるということです。二項対立とは、二つの項が両極端に区別されていて重ならないということです。考えてみますと、生物学的性別に対する一般的な理解も、男と女が、ばっちり二つに分かれている二項対立です。生物学的に、男であって女でもあるとか、男でも女でもないという存在は想定されていません。すると、ジェンダーはセックスに基づいているという生物学的基盤論に従えば、女らしさ・男らしさも、ばっちり二つに分かれていることになります。実際その通りで、「かぎ穴」と「かぎ」、「陰」と「陽」、「凸」と「凹」など、女らしさと男らしさは互いにおぎないあいながら対立する関係によって捉えられてきました。

〈セックスは程度問題〉

ところが、その後の性科学の発達によって、いろんなことがわかってきました。そのうちの一つは、人間の性が、お母さんのおなかの中でどのように決まっていくのかということです。胎児の性は、染色体、ホルモン、内性器、外性器の四つのレベルで分化するそうです。さらに、このどのレベルでも性の分化というのは、女か男にきっちり分かれるものではない、程度問題だということがわかってきたんです。

〈ジェンダーが程度問題であるセックスを二項対立の男女に区別している〉

セックス、つまり生物学的な性別が程度問題だとしたら、程度問題である生物学的性別を女と男に区別しているのは、「人間は女か男のどちらかである」という社会的信念（ジェンダー）であることになります。今までは、基盤にセックスがあって、それが男女に分かれていて、生物学的に二つに分かれている男女に基づいて、それぞれの社会の男らしさ・女らしさを学ぶという考え方だったんですが、そのベースになるセックスのほうが程度問題だとしたら、じゃあ何が性別を判定する行為を正当化しているのか、程度問題であるセックスを二つに分けているのは、実はジェンダーのほうではないかと指摘されるようになったんです。

たとえば、生まれたばかりの赤ちゃんの性別は、たいがい外性器によって判定されます。外性器の形状は、個々の赤ちゃんによって大きさも形も様々な程度問題でしょう。けれども、社会が「人間は女か男のどちらかである」という信念に満ちているので、私たちは個々の赤ちゃんを女か男のどちらかに振り分けます。「おめでとうございます。元気な女（男）の子ですよ」という行為を正当化しているのは、生物学的に決定された性器の形状ではなく、実は、ジェンダーにかかわる社会的信念なのです。だからこそ、誕生時に小さなペニスによって「女」と判定され女の子として育てられた子どもが、思春期になってひげが生える。あるいは、誕生時に大きな外性器によって「男」と判定された子どもが、思春期に胸が大きくなる場合があるのです。

1.2 ジェンダーする行為

そこで、生物学的性別に基づいていないのならば、ジェンダーとは何だということになったんです。そこで新しく提案されたのが、ジェンダーとは最初からあるのではなくて、私たちが行為することで表現するものではないかという考え方です。今度は行為が注目されました。この行為というのは専門用語で、performativity、practice、実践と呼ばれています。

どういうことかと言うと、生物学的基盤論によれば、私たちは、生まれながらの女／男（セックス）に基づいて、それぞれの文化の女／男らしさ

を習得し、習得した女／男らしさに基づいて行為するということになります。ことばの場合で言えば、私たちは、女／男らしさを表現するために、あるいは、女／男だから、特定の言葉づかいをすると考えられていました。たとえば、ある場所に男女がいて、男女の言葉づかいが違ったとすると、それは、話し手が女らしさ・男らしさを表現するためにことばを使ったから言葉づかいが違ったのだと解釈されました。その二人が違う言葉づかいをするのは、女だから、あるいは男だからだと説明されてきたんです。私の専門のことばの分野でも、日本に「女ことば」があるのは、日本の女性が女らしさを表現するために、男性とは違う言葉づかいをしてきたからだというのが、長いあいだ研究の前提だったんです。

行為に注目した新しいジェンダーの考え方は、私たちは、行為する以前に、特定の女／男らしさを持っているわけではない。行為することによって、さまざまな女／男らしさを表現するんだと主張しています。行為を中心において、私たちが人とかかわり合ったり、しゃべったり、動いたりすることによって女らしさ・男らしさを表現すると考えると、あらかじめ私たちが特定の女らしさ・男らしさ（ジェンダー）を持っているわけではないということになります。

〈さまざまな女らしさ・男らしさ〉

むしろ、行為することによって、さまざまな女らしさ・男らしさを表現する。ジェンダーというのは、ある人が「持って」いたり、人がどちらかのジェンダーに「属している」ものではなくて、同じ人だって、すごく女らしい時もあるし、女らしくない時もある。今の私は、私の領域からいうと、すごく女らしくしゃべっているほうです。うちに帰ると、とんでもないおばさんになりますけれども。ジェンダーは行為によって表現するものだと考えると、女らしさ・男らしさにもさまざまな種類があるということになります。私みたいなおばさんの女らしさと、高校生ぐらいの女の子の女らしさは、同じ女らしさでも全然違います。こちらのようなナイスな紳士の方の男らしさと、高校生ぐらいの男らしさは、全然違う。

さまざまな女らしさ・男らしさがあるということを認めたことが、新し

いジェンダー概念の特徴の一つなんです。行為によって表現されるジェンダーの多様性を表現するために、それまでの二項対立な「女／男らしさ」にかわって、「女性性／男性性」という用語を使う人もいます。新しいジェンダー概念がさまざまな女らしさ・男らしさを前提にしているのは、ジェンダーはその人のアイデンティティの一つの側面にすぎないと考えているからなんです。私たちのアイデンティティは、職業、人種、居住地域、経済階級などにも大いに影響を受けています。女だからといって、みんな同じではないですよ。このジェンダーに関わるアイデンティティの側面は、ジェンダー・アイデンティティズ、複数ですね、と呼ばれます。

ジェンダーは、行為の原因ではなく、行為の結果あるいは行為の効果である。ことばの場合で言えば、女らしさや男らしさというのは、最初から私たちの中であって、私たちはそれを表現するためにことばを使うのではなく、いろいろな場面で、いろいろなことばを材料として使うことで、いろいろな女らしさや男らしさを表現しているのだという考え方です。これは、今までとまったく逆の考え方です。今までは、女らしさや男らしさというものが最初からあって、それを表現するためにことばを使っている。新しい考え方は、私たちは社会にあるいろんな材料、そのうちの一つはことばですけれども、それを使って、この時にはこういう私、この時にはまた別の私を表現する。そういう、まったく反対の考え方が可能になったんです。

1.3 行為を可能にする資源

もし私たちが、いろんな材料を使って、その時々いろんな私を表現しているとしたら、そこには表現する材料があるはずなんです。その材料のことを私は資源と呼びます。社会には、個人が行為する以前に女／男らしさと結びついた資源がある。その一つが、ことばです。けれども、ことばだけではなくて、洋服や髪形も立派な資源です。

これが、「ジェンダーを装う」というテーマの背景にある考え方です。「ジェンダーを装う」が表現しているのは、ジェンダーは最初から私たちが持っているものではなくて、装ったり、着替えたりすることができる

いう考え方です。とても素晴らしいテーマだと思ったので、時間を使って説明をさせていただきました。

1.4 変革する行為

では、この新しいジェンダーに対する考え方には、どのような意義があるのでしょうか。三つだけ、お話ししたいと思います。

〈行為の主体と行為の結果表現される女／男らしさを区別している〉

一つ目は、行為する人と、行為の結果表現される女らしさや男らしさを区別しているという点です。これまでは、「女は女だから女ことばを話す」とみなされてきました。これは、行為する人の「女というジェンダー」を行為の結果表現される「女らしさ」と結びつけた考え方です。

反対に、ジェンダーは行為によって表現されると考えると、女でも男でも、女ことばを使って女らしさを表現することができることになります。つまり着替えることが可能になるのです。例えばセーラー服というのは、女子中高生と結びついた資源です。私、今日はセーラー服を着てこよかなとも思ったんですけども。笑ったでしょう、みんな。もちろん、セーラー服というのは、女子中高生と結びついていますから、私がセーラー服を着た姿を想像して笑われたんだと思うのです。けれども、考えてみれば、セーラー服という材料を使えば、誰でも女子中高生になれるんです。ちょっと目を背けたくなる結果になるかもしれませんが、この人はなろうとしているのだなということは、わかります。

同じように、「女ことば」は男性も使えます。女がしゃべってきた言葉づかいが「女ことば」だというように、話し手と行為をぴったりと直結させてしまうと、そういったバリエーションが説明できません。けれども、男の人だって「女ことば」のような言い回しをすることもありますし、今、テレビで大活躍をしているおネエキャラのみなさんも、女性よりも女らしい言葉づかいを使って、それぞれのキャラを自由に表現しているでしょう。そういうことも説明することができるようになるんです。

ここで興味深いのは、私たちがアイデンティティの表現に用いることの

できる資源には、制限もあるという点です。さっき私が「今日はセーラー服を着てこようと思った」と言った時に、みなさんが笑ったのは、その制限になるんです。セーラー服を着て、女子高生としてのアイデンティティを無理なく表現できる女性には、年齢的な制限があるのです。もちろん、制限は破っていいんですよ。私が着て来たって、違和感があるかもしれないけれど、それなりに受け入れていただけたかもしれないんで。でも、制限があるんです。若い女子だけがセーラー服を着て、女子高生のアイデンティティを表現できるという制限です。だから、ある意味セーラー服という資源は、若い女子とそうではない女子を区別するという機能も果たしているんです。

〈アイデンティティ資源の成立過程を研究できる〉

二つ目は、アイデンティティの資源が、どのような政治・経済過程の中で成立してきたのかを明らかにする道が開けるという点です。もし若い女子とセーラー服の結びつきに必然性がないのならば、そもそも、なぜセーラー服が若い女子を表現する資源になったのかを調べることができるようになります。まだ、セーラー服については調べていませんが、何らかの歴史的な理由で、セーラー服という洋服の記号をつくることで、若くて教育ある女子を、他の人から区別する必要があったわけです。

同じように「女ことば」も、なぜ日本語に「女ことば」があるのか、その成立過程を調べることができるようになりました。今までは、女の話してきた言葉づかいが「女ことば」で、女は女だから「女ことば」を話すのであり、それ以上の説明は必要がないと言われてきたんです。けれども、女性が言語行為を行う以前に女らしさと結びついた「女ことば」があるのだとしたら、それが、どのように成立したのかを調べることができるはずです。それを実証した画期的な研究が、私の『「女ことば」はつくられる』（ひつじ書房、2007年）という本なんです。ここも笑っていただきたいところなのですが。

〈行為が、今ある女／男らしさを変革する〉

三つ目は、私たちが行っている行為は、今ある女／男らしさを変革する可能性を含んでいるという考え方です。これが、新しい「ジェンダーを装う」という考え方のもっとも大きな意義だと思います。今までは、高校生だからセーラー服を着て、女の人だから「女ことば」を話すというように、話し手と行為が必然的に結びつけられていたのですが、「ジェンダーを装う」という新しい考え方に基づけば、結びついていないんです。私だってセーラー服を着て、街を歩けるかもしれないんです。今、みなさんは笑いましたけれど、この部屋にいる全部の女性がセーラー服を着るようになれば、セーラー服という制服によって区別されている区別、若い女性と若くない女性の区別すら、だんだん揺らいでくるかもしれないわけです。

そこには、今ある女らしさや男らしさを変革する可能性をみてとることができます。制限があるから、創造性が生まれる。若い女性と結びついているセーラー服という制限を破って、若くない女性が着るところに創造性が生まれる。先ほども例に挙げた、おネエキャラの方たちの「女ことば」の使い方が、今ある女らしい話し方、男らしい話し方を変える可能性があるという余裕を残しているというところが、「ジェンダーを装う」という考え方のもっとも大きな意義だと思います。

では、「ジェンダーを装う」資源の一つである「女ことば」についての、私の話に入りたいと思います。

2 規範、信念、知識としての「女ことば」

2.1 「女ことば」に対する考え方

みなさん、「女ことば」とは、どんなものだと考えていらっしゃるでしょうか。一般に考えられているイメージは、次の二つです。

- ① 日本女性が昔から使ってきた言葉づかいが自然に「女ことば」になった。
- ② 「女ことば」は自然な女らしさを反映している。

「女ことばとは何ですか」と聞くと、たいがいの人が、「女の人が話している言葉づかいです」と言うんです。日本では、どういうわけか昔から、女性は男性と違う言葉づかいをしてきて、それが何百年も続いてきたから、自然に「女ことば」というものができたと考えられているようです。それでは、「なぜ、日本の女の人は、男の人と違う言葉づかいをしてきたのか」と聞くと、「それは日本の女の人が特に女らしいからだ」と言うんです。それ以上の説明は必要なしというのが、おおかたの一般の方のお答えでしたし、実は、国語学、日本語学の分野でも、それが研究の前提だったんです。でも私は、「女ことば」に対するこのような考え方が、何かしっくりこなかったのです。私の疑問は、大きく三つに分けることができます。

2.2 従来の考え方の問題点

(1) 規範としての「女ことば」—「女はこのように話すべきだ」

第一に変だなと思ったのは、「女ことば」は女の人が自然に話してきた言葉づかいだと言うけれども、「女ことば」には、女はこのように話すべきだという規範（ルール）としての働きがあるんじゃないかということ強く感じたんです。たとえば、女の子が乱暴な言葉づかいをすると、親に、「女の子なんだから、もっと丁寧な言葉づかいをしなさい」と注意をされることがあります。娘がひどい言葉づかいをしていると、「親のしつけがなっていない」と言われます。

もし、「女ことば」が、女性が生まれつき持っている自然の女らしさがにじみ出た言葉づかいだとしたら、注意なんかなくても、女性は誰でも「女ことば」を話すはずではないですか。注意したり教えなければならぬのは、「女ことば」が、女はこのように話さなくてはいけないという規範だからです。しかし、今までの考え方では、この規範としての「女ことば」の働きを説明することができません。

〈話し方のマナー本〉

なぜ「女ことば」には規範としての働きがあるのか。気がついたことの一つは、世の中には、女性のための話し方のマナー本がたくさん出ている

ということです。どんな本があるのか、amazonで、「女性 話し方」で検索してみました。検索結果の最初のページが、例1です。

例1：『女性は話し方で9割変わる』

『ぜったい幸せになれる話し方の秘密—あなたを変える「言葉のプレゼント」』

『女性の美しい話し方と会話術—好感をもたれる言葉のマナー』

『聡明な女性の話し方』

『「品格ある大人」になるための愛される日本語』

『エレガントなマナーと話し方—魅力的な女性になる77のレッスン』

『美人の話し方—そのひとことであなたは愛される』

これを見ると、女の人は、話し方で、愛されるかどうか、魅力的になれるか、幸せになれるか、美人かどうか決まってくるんです。まさかと笑うでしょう。でも、ついこのあいだ私の研究室に遊びに来た男子学生に、「「何とかかしら」、「私、何とかだわ」という人を見たら、どう思う？」と聞いたら、18歳の男子が真顔で「少なくとも美人だなとは思いますが」と言ったんです。現代の話ですよ。女の人は話し方で愛される、魅力的になる、そして美人になって幸せになるという本がいっぱい出ている。その影響で、現代の若い男子も話し方を美人の条件の一つだとみなしているのです。

〈女性の話し方の規範の長い歴史〉

実は、こういう女性のための話し方のマナー本というのは、鎌倉時代からあるんです。当時は「女訓書じょくんしょ」と呼ばれていました。これが、江戸時代に入りますと、寺子屋などで読み書きの教科書として使われます。当時の女の子にとって、読み書きを勉強することは、ある意味、言葉づかいの規範を書き写すことでもあったのです。

さらに明治に入ると学校制度が整備され、これらの女訓書が修身の教科書に使われます。戦後は、今みたいなマナー本に形を変えていくというこ

とで、日本では、女性の話し方に関するマナー本の長い歴史があるんです。これらの女訓書に一貫して見られる教訓は、「女はしゃべるな」。「女はしゃべるな」という規範は、何百年も見られます。女がしゃべると、家が乱れる、国が乱れると言われていました。

このように、日本には、女はしゃべるな、しゃべるんだったらこういうしゃべり方をしろという規範の言説の長い歴史があって、その結果、女らしさが言葉づかいと強く結びつけられたのではないか。「女ことば」という概念には、女はこのように話すべきだという規範としての側面が強くあって、それをつくってきたものの一つは、このマナー本の長い歴史なのではないでしょうか。

(2) 信念としての「女ことば」—「女性が実際に話してきた言葉づかいが女ことばなのだ」

第二の疑問は、「女性が使ってきた言葉づかいが自然に女ことばになった」という考え方についてでした。私のまわりを見渡しても、女の人はいろんな言葉づかいをしています。私も、今は皆さんの前なので、こういう言葉づかいをしています。うちに帰っても同じように話したら、子どもたちが「お母さん、熱でもあるんじゃないの?」と言いますよ。みんな時と場合に応じて、いろんな言葉づかいをしているわけです。男の人もそうです。いつも同じ言葉づかいをしている人なんかいないんです。同じ人でも年齢が上がれば言葉づかいは変わってきます。みなさんの中で、小学生の時と同じ言葉づかいをしている人はいますか。いませんよね。ということは、私たちの言葉づかいは変わるのが当たり前なんです。私たちはさまざまな言葉づかいを使い分けているんです、着替えているんです。それにもかかわらず、千差万別に変化する女性の言葉づかいから、自然にたった一つの「女ことば」というものができてきたんだという、そんなことは考えられないと思ったんです。そうですよね。みなさんが、すぐくうなずいでくださるので、私もだんだん調子に乗ってきました。

〈昔の女性も、女らしい言葉づかいをしていなかった〉

こういうことを言うと、「今の人は女ことばなんか話さなくなったけど、昔の人はちゃんと女らしい話し方をしていたんだ」と言う人がいます。だから私は、ちゃんと昔の資料にもあたりました。それでわかったのは、昔の女性も、女らしい言葉づかいをしない人がたくさんいたということです。たとえば、14世紀の初頭に書かれた宮仕えの女性のための女訓書『めのとのさうし』というのがあるんですが、そこには次のように書かれています。

例2：おもふさまにえみひろげ。のどのあな見え。したのひろき。口わきよりあはふくだりてもいへば。いかにうつくしき口つきも。あしくなり候。(思い切り笑い広げて、のどの穴を見せ、舌を広げ、口の脇から泡を吹いてしゃべれば、どんなに形の良い口も醜くなる。)

私はこれを、自分の部屋で一人で読んでいて笑ってしまいました。教訓にしては、あまりにもリアルすぎる。口のまわりから泡を吹いて、のどの穴を見せて笑ってはいけない、しゃべってはいけないと言っています。たぶんあの時代にも、大口を開けて、のどの穴を見せて、口の脇から泡を吹いて、大声でしゃべりまくる女性がいたからこそ、こういう教訓を書かなければいけなかったのではないのでしょうか。

もう一つ、今度は明治時代の例を挙げます。明治時代の女学生というと、みなさんはどんなイメージを持っていらっしゃるでしょうか。東ね髪にリボンをつけて、髪を風になびかせて、自転車に乗ったり、テニスをしているイメージかもしれません。ところが、これは非常に初期の段階の、お茶の水女子大学の明治10年代の頃の女子学生の写真です(『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房、2007年の表紙写真)。この女子学生たちは、男子と同じ袴をはき、足を開いて座り、腕組みをしています。そして、この面構えです。彼女たちはたいへん人目を引いたらしく、男子の袴や下駄を履き、腕まくりをして、洋書を抱えて歩いている女子学生がいると描写されています。特に私が強く心を引きかれたのは、この女性です(右上の女性)。彼女、誰かに似ていませんか。私には、金八先生で有名な俳優さんに見えるので

すが、この面構え。彼女たちは、私たちが明治時代の女学生にいただくイメージと全然違うんですね。

この初期の女学生がどういう言葉づかいをしていたかという、お互いを、「僕、きみ、何々君」と呼び合い、「やあ、何々したまへ」などと話して、漢語や西洋語も使っていたというのです。一つ例を挙げておきました。

例3：「おちやさん僕の北堂がね……」

北堂とはお母さんのことです。この女子学生は、自分のことを「僕」と言っているんです。

「……先日お前はモウ他^たへ嫁^かさないと時^{とき}が後^{おく}れるから人に依頼^{らい}して置^おたと申しましたが否^{いな}なこと……」

お母さんが、もうおまえはお嫁に行かないと、時が後れるから、つまり、行き後れるから、人に依頼しておいた、誰かいい人がいたら紹介してくださいと言ったのです。だけど「否なこと」、そんなのは嫌だと言っているんです。

「本^{ほん}とうにそうですよ曖^{あいまい}昧^{もつ}とした亭^{てい}主^{しゅ}なんぞを持^もつのは不見^み識^しですよ君^{きみ}きつと北堂^{きたう}へ断^{ことわ}りたまへ」(『読^よ売^う新^{しん}聞^{ぶん}』明治8年10月3日)

おちやさんが答えているんです。曖昧とした亭主を持つのは不見識。結婚を否定しているのでしょう。相手のことを「君」と言って、「きつと北堂へ断りたまへ」と言っているんです。

この二人が、どういう女子学生として描写されているかという、頑張って勉強をして女教師になったら、ナイスな役者もあげられるし、モニイがたくさん入るからという話をしているんです。ナイスな役者があげられるというのは、美形の役者をボーイフレンドにできるし、モニイというのは、お金のことです。お金もがっばり入るから、だから私は勉強をしているというつくりの、二人の会話なんです。

ここに使われている「僕」「君」「何々したまへ」というのは、当時、「書生言葉」と呼ばれていた男子学生の言葉づかいです。当時は、初めて女子が学生になった時なのですが、女子は自分たちのことを女子学生になったとは思わずに、自分たちも学生になったから、男の学生と同じ服装をし、同じ言葉づかいをして、勉強をしたのではないかと思います。

14世紀と明治時代の例を見てきましたが、女性が男のような言葉づかいをしていて、けしからんという批判は、明治、大正、昭和、そして現在に至るまで、絶えることなく見つけることができます。女性の言葉づかいは、常に批判されているんです。

これは何をあらわしているかということ、昔も今も常に男のような言葉づかいをする女性がいたということです。昔も今も、それぞれの時代に、大口を開けて笑うなどと言われても笑い、しゃべるなどと言われてもしゃべり、そして、おまえは女子学生なんだと言われても、「僕」「君」「何々したまへ」と言っていた人が、実際にいたということなんです。当時は、テープレコーダーなんかありませんから、当時の女性や男性がどういう言葉づかいをしていたか直接調べることはできませんが、批判があるということは、常に男のような言葉づかいをする女性がいたと推測することができるんです。これは至極当然なことです。どんな女性でも男のような言葉づかいをする時があるし、どんな男性でも、丁寧な優しい言葉づかいをする時があるのですから。

〈「最近の言説」がつくり出す、昔の女らしい言葉づかい〉

ではなぜ、昔の女の人は女らしく話していたと信じられているのでしょうか。この信念をつくり出しているものの一つが、新聞の投書などでよく聞く、「最近、女の人の言葉づかいが男ようになってしまった」という嘆きの投書です。

例4：「最近、自分も含め、若い女性の言葉遣いの悪さが目立つように思う。」

22歳大学生（『朝日新聞』1999年3月11日）

ここには、例を一つしか挙げていませんが、私は新聞の投書を集めたんです。そうしたら、これは質より量だなと思うぐらいすごい数の投書を見つけたことができました。日本の新聞は、全国紙、地方紙とあるんですが、「読者の声」欄を設けているものが多く、「ことばが乱れている」という投書は、毎日どこかの「読者の声」欄に載っているぐらい、投稿欄お気に入りのテーマなのです。

「ことばの乱れ」で何が一番取り上げられるかということ、まず若者の言葉づかいと、それから女性の言葉づかい。この二つが、絶えることなく、日本中どこかで新聞の投書で嘆かれています。もちろんこれは、新聞の編集者が採用するからということもあるんですが、とにかく日本人の大好きなトピックなんです。日本人はいつも、日本語が乱れていると心配をしていて、乱している張本人は、女性と若者だと言いたいんです。それが、毎日、再生産されているということに気がつきました。

ところが、こういう嘆きは、今だけでなく、少なくとも明治時代からあるんです。これも調べました。すると、新聞の投書で、「最近、女性の言葉づかいが男のようになった」という嘆きは明治時代からあるんです。つまり、私たちは少なくとも150年間、「最近、女性の言葉づかいが男のようになった」と言い続けているんです。150年が、「最近」になっているこの不思議。「最近、女性の言葉が男のようになった」「最近の若者の言葉づかいはうんぬん」と、本当にどの投書にも全部、枕ことばのように「最近」がついているんです。これを私は「最近の言説」と呼んでいます。

150年も言い続けて、女性の言葉づかいが直らないのだったら、投書をして意味がないと思う方もいらっしゃるかもしれません。でも、この投書には深い裏の意味があるんです。それは、「最近、女性の言葉づかいが乱れている」と言うことによって、「昔の人は女らしい言葉づかいをしていた」という幻想をつくるという重要な役割です。「最近の女性の言葉づかいはけしからん」と、「最近」を枕ことばに使うことによって、「昔の人はちゃんとした言葉づかいをしていたのに」という幻想をつくり出すという働きをしているのです。

「最近」の批判の言説は、現代の女性のことばを嘆く以上に、昔の女性

は女らしい言葉づかいをしていたという幻想を維持する働きをしている。だからこそ、日本全国の新聞の投書欄に採用されるわけです。日本人と日本の記者と投書する人が、みんなで共謀して、昔の女性は女らしい言葉づかいをしていたという幻想を、毎日つくり続けているのです。

この幻想を支えているのは、「女ことばは、女性が実際に話してきた言葉づかいなんだ」という信念です。今、目の前にいる女性はひどい言葉づかいをしている。けれども、今もどこかに、女らしい「女ことば」を話している女性がいるはずだという信仰にも似た願いです。それは、これが日本語の伝統なんだ、そこにわずかに日本語の伝統を見出したいという、信仰にも似た宗教のような信念です。

このように、二つ目に私が疑問に思ったのは、昔も今も女性はさまざまな言葉づかいを使い分けており、「女性が実際に話してきた言葉づかいが女ことばなんだ」という考え方は、信念にすぎないのではないのかという点です。

(3) 知識としての「女ことば」—「このような話し方が女ことばである」

三つ目に私が不思議だと思ったのは、地域語、いわゆる方言と呼ばれていることばを話す女性の場合です。日本に住んでいる人のほとんどは地域語を話す人です。一方、今ある「女ことば」というのは、少なくとも標準語です。関西では男女の言葉づかいがあまり変わらないと言われます。ということは、地域語を話す人は、身近にいる女性の口から直接、「何とかだわ」「何とかかしら」という「女ことば」を日常的に聞くことがないことになります。特に大阪の方なんかそうじゃないですか。お母さんが「何とかかしら」「私何とかだわ」と言うのを聞いたことのある方いらっしゃいますか？一回も聞いたことがない。そうだと思うんです。ところが、私たちは「女ことば」とは何たるかを知っているんです。不思議ですね。

〈メディアがつくる「女ことば」〉

なぜ、私たちは、身近な女性から聞くことのない標準語の「女ことば」を知っているのでしょうか。それは、私たちが、身近な女性ではなく、む

しろメディアから、「女ことば」を知識として学んでいるからです。漫画、昔話、絵本、アニメ、テレビドラマ、映画、そういうものから、こういう話し方が「女ことば」なんだという言葉づかいを学んでいるんです。

メディアから学ばれるアイデンティティの資源は、「女ことば」以外にもいろいろあります。良く知られているのは、宇宙人の例です。宇宙人が地球に来るでしょう。宇宙人は何ていうんですか。(沈黙) 大阪ではあまり知られていないんですか。私が知っている宇宙人は、地球に来ると、金属的な高い声で、「ワレワレハ、ウチュウジンダ」と言うんです。知っていた人いますか？(たくさん手が挙がる。)安心しました。宇宙人は、「われわれは、宇宙人だ」と言うんです。宇宙人も、日本語をしゃべるんですね。でも、なぜ宇宙人の言葉づかいを知っているんでしょう？宇宙人に会ったことがある方いらっしゃいますか？いないですよ。これなんです。私たちは、宇宙人に1回も会ったことがないのに、宇宙人がなんてしゃべるか知っている。それは、漫画やアニメから宇宙人の言葉づかいを学んでいるからなんです。つまり、高い金属的な声で「われわれは、宇宙人だ」と言うことが宇宙人のアイデンティティを表現する資源になったのは、実際に宇宙人がそう話してきたからではなくて、メディアの中の宇宙人がそういう話し方をしたからなんです。

「女ことば」も同じです。女性が実際に使ってきたから「女ことば」が形成されたのではないんです。「女ことば」も、私たちがメディアから学んだ言葉づかいなのです。ですから、メディアに登場する女性たちが使う言葉も、「女ことば」の形成に重要な役割を果たしてきました。考えてみれば、面と向かった会話よりも、メディアのせりふの方がずっとたくさんの方が聞いています。それだけ、影響力も大きいのですね。

でも、メディアに登場する女性たちが言っているのは、せりふです。作家・脚本家、プロデューサーなどが考えたせりふを言っているのです。その意味で、メディアの中の女性の言葉づかいは、フィクションなんです。つい最近まで、メディアの登場人物のせりふを考える人の大多数は男性でした。だとしたら、「女ことば」は、男性が考えた女性の言葉づかいだとも言えるわけです。

今の若い女性で、「女ことば」を話す人などいないと言われていますが、私に言わせると、昔からいなかったんだと思います。メディアの中で、女優さんがせりふとして話していただけだったと思うんです。昔のホームドラマには、夫が家に帰って来ると、妻が手伝って、背広を脱がせてハンガーに掛ける場面が必ずあったんです。私は、うちがお菓子屋ですから、父もめったに背広を着ないし、母がそんなことをしているのを1回も見たことがないんです。どうですか、昔はそうでしたか？失礼ですが、帰って来た時に背広を脱がせてもらって、ハンガーに掛けてもらいましたか？ないですか。そうですね。それと同じで、「何々かしら」「何々だわ」という言葉づかいも、ドラマやメディアの中だけの幻想だったと思うんです。「昔の女性は、女らしい話し方をしていた」というのは、「昔の女優さんが映画の中で女らしいせりふを話していた」のを勘違いしているのではないかと思うのです。

現実の女性は、何かの時に、たまには「女ことば」を利用する。女らしく見せたい時だけ、一生に一回かもしれませんけれども。利用したんですか？お見合いの時？そういう時があるかもしれませんね。

〈翻訳が再生産する「女ことば」〉

現代は、女性の作家・脚本家、プロデューサーなどが活躍しているので、昔ほど幻想にまどわされたせりふが使われなくなりました。テレビなんかでも、生身の人間があんまり女らしいことばを使ったら、笑ってしまいますよね。では、現代もっとも典型的な「女ことば」を使っているのは誰かという、翻訳なんです。現在、もっとも典型的な女らしい「女ことば」を話しているのは、日本人女性ではなくて、翻訳の中の外国人女性なんです。それが次の例5ですね。

例5：「まあ、あんまりうまくいかなかったわね。私も練習のつもりで簡単な呪文を試してみたことがあるけど、みんなうまくいったわ。私の家族に魔法族は誰もいないの。」

これは、みなさんよくご存じの『ハリー・ポッターと賢者の石』の中に出てくる、ハーマイオニーという女の子のせりふです。ハーマイオニーが、最初に登場してきた時のせりふの翻訳です。この時の年齢は、小学校5年生、11歳です。11歳の少女のことばがこれです。「あんまりうまくいかなかったわね」、「みんなうまくいったわ」、「私の家族に魔法族は誰もいないの」と、今どきの小学5年生の女子で、こんな言葉づかいをしている人を聞いたことがありますか。ないですよ。

なぜ、こういうことが起こるのか。それは、「女ことば」が知識だからなのです。だから、知識としての「女ことば」が、翻訳をする過程に影響を与えてしまうのです。これは、翻訳者の方もそうおっしゃっています。現代の私たちは、翻訳された本や映画から日本語の「女ことば」を学んでいるという、すごくグローバルなお話になってまいりましたけれども。ミニーマウスや「ポパイ」のオリーブを知っていますか。ありがとうございます。今日はすごく話しやすいです。同じぐらいの年齢の方が「うん、うん」と言ってくさるので。日本の少女が一人も「女ことば」を使わなくても、ミニーマウスやオリーブ、ハーマイオニーが、ちゃんと日本語の「女ことば」を伝えてくれているんです。面白いですね。このような離れ業ができるのも、「女ことば」が、このような話し方が「女ことば」なんだという知識だからなんです。

そこで、この三つの疑問に基づいて、「女ことば」を、女性が使ってきた言葉づかいではなく、(1)女はこのように話すべきだという規範、(2)女性が実際に話してきた言葉づかいが「女ことば」なのだという信念、(3)このような言葉づかいが「女ことば」なんだという知識として捉え直そうとしたのが、この『「女ことば」はつくられる』という本なんです。

2.3 何が「女ことば」をつくってきたのか—メタ言語的言説

そこで問題になるのは、「女ことば」が女性が実際に話してきた言葉づかいでないのならば、何が「女ことば」をつくってきたのかという点です。実は、その答えは、これまでのお話の中ですでにみなさんにお話ししています。私は、その答えを、メタ言語的言説と名前を付けてみました。メタ

言語的言説とは、言葉づかいに「ついて語る」ことばです。言葉づかいはこうあるべきだとか、言葉づかいはこうしなくてはいけないとか、言葉づかいはこうなっている、最近の言葉づかいはこうだ、というように、言葉づかいに「ついて語る」ことばです。メタというのは、一つ上のレベルのことです。特定の言葉づかいを使うのではなくて、一つ上の高みから、言葉づかいに「ついて語る」ことばを、メタ言語的言説と名付けました。このメタ言語的言説という視点から、これまで見てきた「女ことば」の三つの側面を捉え直してみましよう。

〈メタ言語的言説がつくってきた「女ことば」〉

最初は、規範としての「女ことば」の側面です。規範としての「女ことば」をつくってきたのは、鎌倉時代から現在まで続く女性の話し方に「ついて語る」マナー本でした。マナー本が長いあいだ、女は話すな、こういう言葉づかいをするべきだと、女の言葉づかいに「ついて語る」ことによって、規範としての「女ことば」がつくられてきたのです。

二つ目は、信念としての「女ことば」の側面です。これは、「女性が実際に話してきた言葉づかいが女ことばなんだ」という信念でした。そして、この信念を生産してきた強力なメタ言語的言説の一つが、新聞の投書でした。「最近、女の言葉づかいが男のようになった」と嘆く新聞の投書欄です。これも女性の言葉づかいに「ついて語る」メタ言語的言説です。

三つ目は、知識としての「女ことば」です。このような言葉づかいが「女ことば」なんだ、という知識としての「女ことば」の側面です。これを私たちはどこから学んでいるかというと、メディアで使われている言葉づかいです。実際の女性の言葉づかいではなくて、フィクションの登場人物が使っている言葉づかいですから、台本があったり、翻訳の原稿があったりします。これも、そういう意味では、いわゆるメタ言語的な言語行為です。

この他にも、メタ言語的言説には、いわゆる専門家と呼ばれる人たち、国語学者や評論家の発言など広い範囲の「ついて語る」ことばが含まれます。

〈メタ言語的言説による「女ことば」の歴史的形成〉

このように考えますと、私たちは、メタ言語的言説を分析することで、「女ことば」だけではなく、アイデンティティ表現の資源となっているさまざまな言葉づかいがなぜ形成されたのかを明らかにすることができることとなります。『「女ことば」はつくられる』では、鎌倉時代から第二次大戦後までのメタ言語的言説を分析して、「女ことば」が、歴史的にどのようにつくられてきたのかを明らかにしました。大きな発見の一つは、女と言語の関係、女がどういう言葉づかいをしているか、女の言葉づかいがどのくらい乱れているのかというトピックは、長い歴史を通して常に日本人の興味関心の中心事項であったということです。その取り上げ方は、嘆いたり、批判したり、賞賛しているのですが、いつの時代でも、多くの日本人が女の言葉づかいに「ついて語る」ことばに意味を見出しているんです。

『連続講義 暴力とジェンダー』（白澤社、2009年）には、戦争中に「女ことば」が賞賛されたことを書きました。戦争中には、日本は東アジアを植民地化し、植民地の人たちに日本語を教える同化政策が採られました。そして、日本語を教えることを正当化する理由として、日本語は優れた言語なんだと言わなければならない時代に、「女ことば」が賞賛されたんです。つまり、日本語は男女で違う言葉を使うぐらいとても精緻で優れた言語なんだと言うために、突然「女ことば」が賞賛されたんです。

ここまでは、「女ことば」は、女性が使ってきた言葉づかいなのではなく、アイデンティティを表現するために誰でもが使うことができる資源だというお話をしました。そこで次の問題は、「女ことば」と私たちの言語行為、ことばを使ってお互いにかかわり合う行為はどんな関係にあるのかという問題です。その問題について考えたのが、『〈性〉と日本語—ことばがつくる女と男』（NHKブックス、2007年）です。

3 「女ことば」が私たちの言語行為に与える影響—資源と制限

また「言語行為」という難しいことばがでてきましたが、言語行為とは、私たちがことばを使って自分を表現したり、お互いを理解しあう過程です。

この過程で、私たちは「女ことば」という材料をどのように使っているのか。「女ことば」と言語行為の関係は大きく二つあります。一つは、「女ことば」が言語行為の資源となるという関係です。先ほどからお話ししております、アイデンティティを表現する材料としての「女ことば」です。もう一つは、「女ことば」が言語行為を制限するという関係です。セーラー服の例でありましたように、誰でもセーラー服を着ていいんですけども、ちょっと私が着ると違和感があるかなという、この制限です。「女ことば」も同じで、資源として使えますけれども、若い女の人が「何々かしら」なんて言ったら、ちょっとすかしていると思われる。「すかしている」ということばはもう使わないかもしれませんね。「何々かしら」と言う女性が、「「かしら」の〇〇さん」というあだ名で呼ばれるようになったという話を聞いたことがあります。ですから、制限があるんですね。私たちは、「女ことば」の資源を使い、「女ことば」の制限を調整しながら、言語行為を行っているのです。

〈創造的な言葉づかいによる革新〉

この資源と制限が、実は私たちの創造的な言語行為の原動力なのです。制限があるから、創造する。私も、セーラー服は着られないけれど、セーラーカラーのスーツは着られるかもしれない。制限があるから創造が生まれ、その創造的な言語行為には、今ある女らしさや男らしさを変えていく力があるのです。女は女だから「女ことば」を使うのであり、それ以上の説明は必要なしとするのでは、女が女である限り、「女ことば」も、「女ことば」が支えている女らしさも、変化させる余地がありません。

けれども、これまでお話ししてきたように、女という話し手と「女ことば」を切り離して、「女ことば」を資源と制限として捉えることで、私たちは、すごく創造的な言葉づかいをしていて、その時々、それぞれのさまざまな女らしさや男らしさ、大人らしさや子どもらしさ、いろんなアイデンティティを表現しているということがわかるようになるんです。

例えば、「女ことば」や「男ことば」は、何も女らしさや男らしさを表現するためだけに使われているわけではありません。次の例は、藤原てい

さんの『流れる星は生きている』です。これは、昭和20年の敗戦時に、生後1カ月と3歳と6歳の3人の子どもを連れて、藤原さんが満州から引き揚げた道のりを記した書です。ちなみに、この時の生後1カ月の赤ちゃんは、あの『国家の品格』を書いた藤原正彦さんです。そして、三十八度線を目指し、泥道を死に物ぐるいで歩いていた時、子どもたちが「お母ちゃん、歩けない」と言うんです。すると藤原さんは、次のように怒鳴るのですね。

例6：「正広、なにをぐずぐずしている！」

「正彦、泣いたら、置いて行くぞ！」

「自覚しないで私の口をついて出てくるものは激しい男性の言葉であった。」（藤原てい『流れる星は生きている』中公文庫）

「女ことば」は女らしさを表し、「男ことば」は男らしさを表していると考え、この時、藤原さんは男らしさを表現したことになってしまいます。そうでしょうか。藤原さんは、なぜこの時、こんな言葉づかいをしたのでしょうか。私もくたびれてきたので会場にふることが増えていきます。覚悟をしておいてください。

○会場 子どもを励ますというか、力づけるという、そういう力強いパワーが必要だった。

○中村 おっしゃるとおりです。また、ご自身も力づけなきゃいけませんよね。そして、こういう男らしく力強いことばを使う必要があるのは、何も満州から引き揚げるといふ極限の状態の時だけではありません。例えばスポーツをしていて、「いくわよー」なんてやっていたら試合では負けてしまいます。オリンピックに出るぐらいの人だったら、少なくとも「いくぞ!」、「いくよ!」ぐらいは言わないと、気持ちがなえてしまう。私たちは、「女ことば」も「男ことば」も、いろいろな状況でいろいろな目的のために使い分けられているのです。

〈小中学生女子が使う「おれ・ほく」〉

最後に、創造的な言語行為の例として取り上げたいのは、小中学生の女子が使う「おれ・ほく」です。みなさんは、小中学生の女子が自分のことを「おれ・ほく」と呼ぶのを聞いたことがありますか。関西では、あまり問題にならないですか。

この言葉づかいが、新聞の投書や専門家にどのように語られているかという、一つは、「女ことば」が乱れている例として批判されます。もう一つは、「男子と同じように自己主張したいお歳ごろだから心配しなくていい。大きくなれば、ちゃんと自分のことを私と呼ぶようになりますから。」という専門家のご意見です。実際そのとおりで、女子も先生や親には「おれ・ほく」とは言わない場合が多いですし、私ぐらいの年齢になっても、自分を「おれ・ほく」と呼んでいる人は珍しいです。みなさん、小中学校で自分のことを「おれ・ほく」と言っていた人はいますか。(数人手を挙げる。)今だに言っていますか。今はやめた? やめたばかり。うれしそうですね。そうですか。

〈メディアを創造的に利用する子ども〉

うちの娘は小学校の時に、自分を「わて」と言っていました。弟を中心に、まわりにすぐ広まりました。うちの娘と息子の友だち全部が「わて」になりました。どこからそれを学んだのかと思ったら、当時よく見ていた『爆走兄弟レッツ&ゴー』というミニ四駆のアニメなんです。その中に、サルの顔をした何とか藤吉という人が出てきて、大金持ちのおぼっちゃんなんです。その人が、「わて」と言うんです。そこから拝借していたんですね。今の子どもたちも『クレヨンしんちゃん』の影響が大きくて、みんな「おら」と言うでしょう。子どもたちは、メディアの言葉づかいをすぐに取り入れて創造的に使っています。

私は、自分を「わて」と言う人は、相手のことを何て言うのかなと思っていました。そこで、ある日、息子が友だちとしゃべっているのを、じっと聞いていたんです。そしたら、「あんさん」って言ってました。(会場爆笑。) 東京で、小学2、3年の男の子が二人で、「わて」「あんさん」と言ってい

ましたけれど。そんなにおもしろいですか。これが一番受けたかも。やっとこの時間になって、どういう話が大阪の方に受けるかわかりました。小さな子どもでも、いろいろに使っているんですね。

〈「わたし」を使いたくないから「おれ・ほく」を使う〉

先ほどお話ししましたように、今まで少女の「おれ・ほく」は、「女ことば」が乱れている例か、男子と同じように自己主張をしたいお歳ごろの例として語られてきたんです。

でも、今見たように小学生だって自分を表現するためにさまざまなことばの資源を使い分けしているとしたら、まったく違う見方ができます。小中学生の女子も自分で選んで「おれ・ほく」を使っているのではないかと考えることができます。なぜ、女子は「おれ・ほく」を使うのか。私は、「わたし」を使いたくないからではないかと思ったんです。どうしてそう思ったかという、女子は「おれ・ほく」以外にも、「うち・わし」も使っているんです。このあいだ、私が会った小学5年生も、お母さんの前で「わし」と言っていました。

「おれ・ほく」は「男ことば」の人称詞ですが、「うち・わし」は、どちらかという地域語です。だから、女子は「男ことば」を使いたいのではなくて、むしろ「女ことば」の「わたし」を使いたくないから、他の自称詞を借りてきたのではないかと思うんです。ことばというのは社会的な約束ごとですから、今日から私のことを「わたほ」(わたし+ほく)と呼ぶ、と決めても、通じません。やはり、どこかから借りてこないと人称詞だということはわからない。だから、男子の「おれ・ほく」や地域語の「うち・わし」を借りてきたのではないかと考えたのです。

〈女性的セクシュアリティのジレンマ〉

なぜ、女子は「わたし」を使いたくないのか。それは、「わたし」という大人の「女ことば」で自分を女として表現したくないからではないか。ここに、女のセクシュアリティがかかわっています。異性愛社会の中で大人の女になるということには、男性の性の対象物になるという意味も含ま

れています。異性愛の中では、男性のセクシュアリティは能動的で積極的に設定されています。一方、女性のセクシュアリティは、どちらかという
と受動的で、受動的な側面があります。ですから、ある意味、少女にとって、大人の女になることは、男に犯されるという危険も引き受けるという側面があるのです。電車
の中で痴漢に遭う危険性ですね。大人の女になることは、ある意味、性愛
の対象になりたいという欲望と、なってしまうと性の対象物に墮落させら
れてしまうというジレンマの中で、微妙なバランスを保って生きていくと
いう側面があると思うのです。

〈女を性の対象物とみなす異性愛〉

ところが少女の場合は、さらに微妙な時期になります。小学校の5、6
年生生という、ちょうど異性の友だちを意識する時期です。異性につき合
う子は、友だちの中でも、「何々ちゃんは、何々君とつき合っている」と、
ちょっと一目置かれる存在です。異性にまったく興味を示さない子や、相
手にされない子は、友だちのあいだでも微妙な立場になるわけです。

男子の場合は、男性的セクシュアリティが能動的に設定されていますから、異性につき合っても男らしさとは矛盾しません。だけど、女子の場合、
微妙なジレンマがあるんです。異性につき合うと、大人っぽくて、友だち
に一目置かれるようになるけれども、ある意味、異性愛というのは、女を
性の対象物とみなしていますから、おませな、ちょっとふしだらな子とい
うレッテルを貼られる可能性も出てくるんです。

その関係を大ざっぱにあらわしたのが、次ページの図です。この図は、
異性愛を意識し始める小中学生のアイデンティティを三つの観点からプ
ラスとマイナスに分類したものです。クラスの集団の中で、子どもたちは、
このプラスとマイナスのさまざまな位置に位置づけられると考えられま
す。

図1の「男子のアイデンティティ」を見ていただきますと、男子は、異
性愛カップルになったほうがプラス。男子のあいだでも認められて、友人
間の地位もプラスになります。しかも、異性愛は男性的セクシュアリティ
を能動的に設定していますから、男らしさとも矛盾せずにプラスとなりま

す。つまり、男子の場合は、プラスとマイナスが矛盾せず、異性愛カップルになればなるほど、友人間の地位も上がるし、能動的なセクシュアリティも向上するのです。

ところが、図2で示されている女子の場合は、異性カップルになったら、大人っぽさでプラスで、友人間の地位も上がるけれども、性の対象物としての女性的セクシュアリティという意味では、マイナスなんです。ここに、子どもっぽくて相手にされないのもいやだけれども、あまり異性愛に積極的になって、ふしだらな性の対象物とみなされたくもないというジレンマが生まれるんです。

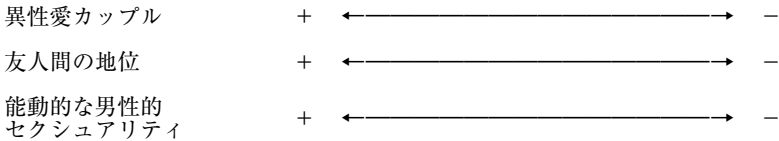


図1 男子のアイデンティティ

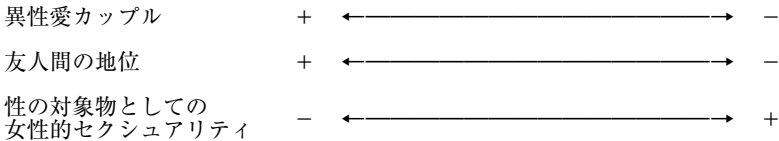


図2 女子のアイデンティティ

少女は、大人の女になりきってしまうのも嫌だし、友だちから相手にされない子どものままでいるのも嫌だという微妙な立場なんです。自分のことを「わたし」と呼んで、完全に大人の女のルールに乗ってしまうのも嫌だし、自分を「○○ちゃん」と呼んでいつまでも子どもっぽく、友だちにばかにされるのも嫌。いつか大人の女のジレンマを引き受けなければならない時が来るまで、どちらの選択もしたくないのです。そこに、少女が「わたし」を避けて、「おれ・ほく」や地域語の「うち・わし」を借りてくるひとつの動機があるのではないのでしょうか。

〈男装の少女—女性的セクシュアリティの超越〉

女子が、女性的セクシュアリティにためらいを持っていることは、男装の少女が、常に人気の高いキャラクターであるということからもわかります。これは、日本で初めての少女向けストーリー漫画である手塚治虫さんの『リボンの騎士』です。これは、リボンをつけた少女の王子さまが、馬に乗って悪い敵をやっつけるお話です。さらに、みなさんよくご存じの池田理代子さんの『ベルサイユのばら』。「オスカル」「アンドレ」というあれですね。これも男装の少女が活躍するストーリーです。

なぜ、私たちは男装の少女にひきつけられるのか。理由はいろいろあると思いますが、その一つは、性の対象物でもないし、子どもでもない、現実には不可能な新しい少女としての魅力ではないでしょうか。性の対象物である女になってしまうのか、友だちから相手にされない子どものままでいるのか。女性的セクシュアリティを日々調整している少女にとって、このジレンマを突き抜けている男装の少女は魅力的です。

〈新しい少女性の創造〉

この意味での男装とは、男のようになるというよりも、女性的セクシュアリティの保留、あるいは、新しい少女性です。女でも子どもでもない、「新しい少女性の創造」と考えることができると思うんです。このように、少女の「おれ・ぼく」の使用を、「うち・わし」なども考慮し、さらに微妙な少女という時期のセクシュアリティの調整と兼ね合わせて見ていくと、実は少女もさまざまな局面で新しい少女性を表現しているという、今までとまったく違う見方ができるんです。

男子のように主張したいから「ぼく」を使うのではなくて、女になりたいくないから、「わたし」を使わない。「わたし」を使わないことで、女のセクシュアリティを引き受けない少女性を表現する。このような言語行為には、今ある異性愛のセクシュアリティを顕在化させ、変革していく可能性も感じられるんです。

〈少女の「男ことば」のエロス化〉

でも社会は、このような少女の創造的な言語行為を、決まりきった異性愛の中に収めてしまう装置もちゃんと用意をしています。その一つが、テレビゲームの少女キャラクターが使う、「ボク・キミ」です。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、恋愛シミュレーションゲームです。たとえば、これは、恋愛シミュレーションゲームの古典と言われている『ときめきメモリアル2』です。このゲームでは、男性プレイヤーがゲームに登場してくる女子高校生と会話をすることで恋愛を発展させていきます。ですから、ことばがすごく重要な働きを持ったゲームなんです。その中で、次のような例があります。

例7：A：ボクはいいけどあんな言い方したら、キミに失礼だよ、全く。
ねえ？……ねえ？

B：いや、だって本当のことじゃない

○中村 これは、どっちが少女で、どっちがプレイヤーだと思いますか。

○会場 Aがプレイヤーですか。

○中村 これは、Aが少女なんです。ゲームには、「ボク・キミ」を使う少女が登場しているんですね。

C：ああ、このでっかいほう、誰だと思う？

D：あっ、一文字さんのお兄さんだね？

○中村 これは、どっちが少女だと思いますか。

○会場 Cが少女。

○中村 そうなんです。だんだん要領を得てきましたね。「でっかい」と言っ

ているほうが、少女です。

E：……ん、どうしたのだ貴様、何か言いたいことがありそうだな？ 言うてみるがいいのだ！

F：この程度って言い方はよくないよ

○中村 これはどうでしょう。

○会場 これは、わかりません。

○中村 これは、実は、「どうしたのだ貴様」と言っているほうが少女なんです。このゲームには、いわゆる女らしい「女ことば」を使う少女は全然登場しません。自分のことを「ボク」と呼ぶキャラクターは、「ボクっ子」と呼ばれて、ゲームの中では人気者なんです。このゲームでは、「わたし」は使わずに新しい少女性を表現しようとしている少女の試みが、異性愛の性の対象物として利用され、消費されています。

ですから、創造的な言語行為といっても、それがすぐにいわゆる女らしさ・男らしさの壁を簡単に打ち破るかといったら、なかなか、それほど簡単ではないのです。というところで、今日のお話をこれで終わりにしたいと思います。最後まで、ご清聴まことにありがとうございました。